

子ども・子育て支援研究センターで活用する  
フレーベルの「遊戯」と「教育遊具（教具）」  
——実践への手引き（1）：家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』——

小笠原 道 雄\*

A Study on the Utilization of Fröbel's "Play" and "Teaching Tools" in Children and Child-Rearing Support Centers : In Consideration of Their Practically (1):  
"The Song and Music of Fröbel's Mother Play" ("Mutter-und Koselieder")

Michio OGASAWARA

Fr. Fröbel has been called "the Father of Kindergarten" because he founded a kindergarten in Germany in 1840 as the first one all over the world. Before the foundation, however, he invented "teaching tools" with which children and their mothers or care-givers would play together, in inquiring into principles of human education for fostering children's autonomy. He continued to invent "teaching tools" up to his later life in explicating the principles theoretically and practically. In other words, he invented educational materials, that is, "teaching tools" to use in a kindergarten as a "place" for care-giving before its foundation, and considered that the utilization of the tools at home, in kindergarten or in school would make possible human education that fosters freedom and independence. Why did he find significance in "play" and invent "teaching tools" that rely on no letter? This study answers the question in considering the practically relations of his "teaching tools" and provides examples of utilizing the tools in children and child-rearing support centers. According as the consideration of their practically study (1) is it to make uncovered the Song and Music of Fröbel's Mother Play ("Mutter-und Koselieder") and to explore the whole idea of his book for child care in home and Child-Rearing Support Centers.

キーワード：

Fr. フレーベル Fr. Fröbel、教育遊具 teaching tool、遊び Play、幼稚園 Kindergarten、子ども・子育て支援研究センター Children and Child-Rearing Support Research Center、『母の歌と愛撫の歌』（The Song and Music of Fröbel's Mother Play）（"Mutter-und Koselieder"）

---

\* 広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科  
Hiroshima Bunka Gakuen University Faculty of Arts and Sciences Department of Childhood Studies

## スローガン

小さな子どもたちの遊びとは一体、何でしょうか？— それは、子どもの生命の小さな始まりに過ぎませんが、生命そのものにとって偉大なものなのです。

(A. B. ハンシュマン著『フレーベル』より)

教育にとって第一に問題なのは、子どもの人間形成にふさわしい素材(教具)を与えることでなければならないのです。

(J. プリュューファ著『フレーベル』より)

## はじめに

Fr. フレーベル (Fröbel, 1782-1852) は、1840年、ドイツに世界で最初の『幼稚園』(Kindergarten キンダーガルテン=子どもの庭)を創設したことで「幼稚園の父」と呼ばれてきた。実は、フレーベルはその幼稚園の創設に先立ち、家庭や保育所・幼稚園で乳幼児と母親・保育者が共に遊び、育む「教育遊具(教具)」(以下、「教具」と表記)を早くから考案し、子どもの自主性を育む人間教育の原則を探求し、それを理論的にも、実践的にも解明し、晩年にいたるまで教具を考案し続けた。つまり、フレーベルは、保育所・幼稚園という教育(保育)的「場所」(空間)の創設以前からその場所で使用する教材、つまり、「教具」を考案し、それを、家庭、幼稚園で活用させることによって初めて自立的で、自由な人間教育が可能になると考えたのである。このような独創的な取り組みは、19世紀の母国ドイツだけではなく、以後、日本を含めて全世界の幼児・保育教育に大きな影響力を与えてきたのである。なぜ、フレーベルは「遊戯」を家庭や幼稚園教育の基本にしようとしたのであろうか。なぜ、文字によらない「教具」(教える道具)による人間教育を考えたのであろうか。このような基本的な問題については、すでに本『紀要』の第1号(平成23年8月刊)でフレーベルの「遊戯」と「教育遊具(教具)」について、新しい諸資料の考察から教具の体系性、つまりその全体像を中心に考察し、「フレーベルの発達の・教育的遊具の体系」(図1)として公表し、あわせて、家庭、幼稚園の教具として、特に、フレーベル遊具として有名な「恩物」(第1恩物から第6恩物)を紹介した。従って、今回はそのフレー

ベルの「教育遊具」の出発点でもあり、同時にフレーベルが最後に到達した家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』を取り上げ、実践の手引き(1)として考察する。家庭や保育所・幼稚園、さらにはその接続学校(施設)や小学校で活用する方法を説明し、具体的に、子ども・子育て研究センターで活用する『遊具』の事例を提示し、説明する。特に広島文化学園大学学芸学部は子ども学科と音楽学科で構成されているので、「音楽」(メロデー)に係わる活動が可能であり、またそれは本学部のおおきな特徴といえる。具体的な「教具の使い方」を説明する前に、フレーベルの「遊戯」と「教具」についての基本的な考え方を今一度整理しておきたい。(以下、「遊戯」とか「遊び」と表記される言葉はドイツ語das Spielの訳語で必ずしも統一されていない。)

## 1. 遊戯の考え方

第一は、子どもの「遊び」とは、「子どもの心の奥底にあるものを、現実に表現するためには、からだの動きを通して、私たちの日常生活の中に、目に見えるように表わさなければならない」ということである。端的にそれは子どもの「自己活動」としての「遊戯」である。

第二に、この「自己活動」は、子どもの生命の発達、すなわち、乳児期、幼児期、少年期等によって「質的」に異なるものと捉え、各時期を「内と外」との関係で把握している。具体的には、1. 身体的な、あるいは聴覚の練習遊び、色彩遊びのような視覚を訓練する遊び、2. 感覚的な遊び、思考や判断力を要する遊び、3. 数や図形のような知的な遊びのいずれかである。

第三は、遊びには「精神と心情と身体とを発達させ強くする力」があるということである。特に、子どもたちが戸外でいろいろな遊びをする場合、例えば、集団遊びの場合、その遊びを通じて友達同士が手をつなぐことから得られる「共通性（みんな同じだ）」と「差異性（異なり）」を習得する。同時に、また「遊び」を通じて子どもたちは、「遊び」自体のもつ「ルール」や遊びの際の「ルール」、例えば、滑り台のもつ高い所から低い所への「滑り」の法則や滑る順番の「決まり」等、広く物事と人間関係のもつ「法則性」を予感することになる。この遊びのもつ「ルール」感覚の習得ということは、晩年フレーベルが特に強調した点である。

このことは子どもの「遊び」と大人の「遊び」とが全く違った意義をもつことを意味している。

このようにフレーベルはあらゆる真の人間形成の基礎は、衝動を基礎とする「活動」に基づくものと考えた。つまり、乳児期、幼児期のごく早い時期に、活動そのものである遊びによって本当の人間形成が始まることになるということである。その際とくに重要なことは、人間の最初の教育者である子どもの両親、保育者、特に母親や保母さんに、子どもの遊びを大切にするように、フレーベルは説いた。それは「子どもの頃の遊びは、——（略）——くだらない戯れではなく、真摯に受けとめなければならないような深い意味をもっている」からである。

## 2. 教具の考え方

フレーベルの考えでは、子どもの発達段階に即して、遊びを考察し、その子どもの成長・発達を促す教材を考案するということである。具体的には、フレーベルは、子どもの生命の発達を乳児期、幼児期、少年期等、いわゆる子どものそれぞれの発達の段階を質的に異なるものにとらえ、その各々の時期にふさわしい遊びを導く、あるいは遊びを活性化する「教具（教材）」を考案するということであった。しかも、フレーベルは子ども達と共に、一緒になって遊ぶことによって、子どもの成長・発達を観察し、よく考えて、それにふさわしい『遊具』の全体像を一生考え続けたのである。

このフレーベルの子どもと一緒に遊ぶという実

践から得られた「教具」の考え方からもわかるように、「教具」と「玩具（おもちゃ）」とは根本的に違うと言うことだ。一体、子どもが手にもって遊べるように作られた「おもちゃ」、「玩具」は、子どもの発達の相や時期を考慮して子どもの全体的な活動を促すという考え方からつくられているのだろうか。子どもの内面の活動を導き、強化するものなのだろうか。そして何よりも重要なことは子どもが手にする「玩具」は体系をもって子どもの発達を促すものなのか。多くの疑問がある。（最近、ドイツや北欧の大きな本屋では広く「子どもコーナー」が設けられ、子どもの発達段階ごと（例えば、三歳、四歳、五歳等）に絵本が配置され、幼児（教育）の専門家が、店員として絵本選びの相談に与っている。無論、日本の任天堂の玩具も置かれているが——。）

それでは最初に、フレーベルの発達の・教育的遊具の体系図（全体像）を示し、子どもの発達の段階に即した「遊具」の具体的な説明に入りたい（特に、今回は日本での事例を中心に紹介し、説明する）。

### I フレーベル「教育遊具」（「教具」）の体系〔図1〕

フレーベルの「教育遊具」は大きくⅠ. 家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』（1844年）、Ⅱ. 遊具手段としての狭い意味での「恩物」と「作業具」から構成された「教具」、そしてⅢ. 運動遊戯の三部から構成されている。その際、フレーベルの教具が、時計文字Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの順序で考案されたのではなく、つまり子どもの成長・発達の順に考案されたのではなく、スイス時代（1832-36）のフレーベル自身の教育実践活動からⅡの教具（一般に「恩物」と「作業具」と呼ばれる「教具」）をまず考案され、次に、フレーベルのスイス時代（1832-36）、フレーベルを支援するためヴィリザウ学園に赴いてその後、ブルクドルフ孤児院の設立、運営にあたった弟子のハインリヒ・ランゲター（Langenthal, Heinrich, 1792-1879）の発案（創作）、実践によるⅢ. 運動遊戯に至り、その上で、長い間の思索と多くの困難を経ながら、出版業者ヨーゼフ・マイアーの意見を入れて作成された晩年の1844年に刊行された家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』である。本書はフレーベルの遊戯論の集

大成であると共に当時のヨーロッパにおける最高傑作の育児書と考えられているものである。これを見てもわかるようにフレーベルの遊具が理論の応用から生まれたものではなく、逆に、子どもの動きを見ながら遊具を実際に使用していく実践の中で、一步一步考案され製作されたことが明らかになる。

#### 1) 家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』：[図2]

母親（保母を含む）のために書かれた本書の表紙には、「幼児期の生活を早くから心を合わせて育てるための身体と四肢および感覚の遊び歌」という副題が付されており、下段には、詩人劇作家として有名なシラー（Schiller, J. Ch. 1759-1805）の一節、「無邪気な遊びにさえ、しばしば高貴な意味がある」という言葉が記されている。本書の詳細なタイトルは、以下のようなもので、ここにはすでに本書の精神の基本線をわれわれに予感させてくれる。

「さあ、子どもたちに生きようではないか！母の歌と愛撫の歌、および身体四肢と感覚の遊戯のための歌。子どもの生活の早期保護と自己保護のために。フリードリヒ・フレーベルによる家庭育児書」。

フレーベル自身、本書の精神（課題）を『母の歌と愛撫の歌』への「指示」の中で以下のように示している。「私はこの書の中に、私の教育法の最も重要なものを示した。それは自然に即した教育のための出発点である。なぜならそれは、人間の素質の萌芽が健全に、そして完全に発達すべき場合には、いかに育てられ、支えられなければならないかという方法を示しているからである」（J. プリューフアーの「あとがき」「この本を生みだした精神」から）。また、同様の課題を信頼する叔母のM. シュミット宛の書簡の中でも述べている。「子どもの身体、四肢および感覚活動の使用を助けるのみではなく、後になってそれらを十全に意識するのを助け、さらには母親やその代理人をして、こうした子どもの保育やその高次の意義や究極的関連を意識させるために、私は生活そのものから現れてきた少しのかわいらし詩と遊戯をすべての幼児の身体、四肢及び感覚遊戯の子守歌（Koselieder）と名づけて、心にとめました」と。重要なことは、「子どもの身体、四肢及び感覚」

を母親や保育者とのスキンシップを通じて強く、鋭くするということである。そのために、子どもと母親や保育者が、ともに「絵」を見、ともに「歌い」、ともに「詩（言葉）」を交わすことが大切なのだ。今日の育児における生理学的意味の重要性を先取りしたもので、すでに述べたように本書は、「絵」（絵画）、「詩」（言葉）、「メロデー」（曲）の三位一体からなる当時考えられる最高の「育児書」で、ヨーロッパにおける育児書の原型をなしたものと考えられる。ただ残念なことに、20世紀に入り、例えば、J. プリューフアー版（1911年版—この版が最も広く普及したのであるが）では、付録として添付されていたR. コールの原譜（メロデー）が削除されて広く世界に流布されたことである。

#### 2) わが国における育児書『母の歌と愛撫の歌』

フレーベルの家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』は、「絵」と「詩」と「メロデー」が「三位一体」をなす育児指導書として高く評価されてきたが、その理想と現実とは異なり、出版年を記すことなく（o. j.）1844年、色々な事情から「絵」と「詩」による『母の歌と愛撫の歌』を本体としメロデーはその付録のような形態で『メロデー本』として巻末に挿入されて刊行されることになる。このように初版ではこの『メロデー本』は、本体末尾に別冊として挿入されて刊行された訳である。このように家庭育児書は、かろうじて『三位一体』の体裁は保ちながら、フレーベルの抱く「育児書」の理念、つまり母親＝子ども＝関係を結ぶ『教具』として貫かれていた。ただ、作曲家R. コールの「メロデー」が子どもにとって、また母親や保母にとっても音程が高く、なかなかの「難曲」であったことから、各国への伝搬の過程で、各国の「民謡」に編曲されたり、「子ども歌」に入れ替えられることになる。このことは大変重要なことである。では一体日本ではこの家庭育児書はどのように受け入れられたのであろうか。この刊行の経緯については拙論の参考文献 11, 12にて論じた。

#### (1) 最初の日本語版『母の歌と愛撫の歌』[図3-1, -2, -3, -4]

1897（明治30）年、アメリカの婦人宣教師A. L. ハウ（Annie Lion Howe, 1852-1943）の熱意と多くの協力者によって、英語版 "Mother-, Play- and

Nursery Songs, poetry, music and picture for the noble culture of child life, with notes to mother” (1878) から訳者兼発行者、アンニー、エル、ハウとして、『母の遊戯及育児歌』のタイトルで神戸の頌栄幼稚園から出版された。

本書はその後日本各地で保育者養成施設のテキストとして長い間使用された。

図3を見て頂きたい。驚くことに「挿絵」はドイツ版のデザインの原型を留めているが、描かれている人物像も、また「メロデー」も全く日本化されているのである。「メロデー」に至っては、「長唄調」に編曲され、まったく自由に訳されている。明治5年の「学制」以降、わが国では教科書等は、アメリカで使用されているものを急遽そのまま日本語化して使用したが内容的には全く理解し難い、意味不明のものが多かった。その反省によるものか？出版の歴史的意義は認めるが、それにしても過度な日本（語）化と言えるのではないか。

(2) ドイツ語版『母の歌と愛撫の歌』からの翻訳本（岩波書店、1934年）[図4-1, -2, -3, -4, -5]

わが国で直接ドイツ語版（原著初版本）を用いて翻訳し、出版したのは、ドイツ文学者であり、ドイツ浪漫主義研究の第一人者であった茅野蕭々（1883-1946）である。正確には本書はドイツのフレーベル研究者であるJ. プリュファァー編纂（1911年版、この版が世界で最も普及した）を定本としてプリュファァーの「跋」（あとがき）：「この著作が生まれでた精神」を掲載し、「私（フレーベル）はこの書の中に私の教育法の最も重要なものを横へた。それは自然的教育にとっての出发点である。何故ならそれは人間の素質の萌芽が健全にそして完全に発展すべき場合には、如何に培われ指示されねばならぬかという方法を示しているからである」（179頁）と記している。原著は当時日本で唯一初版本を所持していたと思われる幼児教育（幼稚園教育）の大家、倉橋惣三（東京女子高等師範学校教授）\*の好意で出版社の岩波書店が貸与され原著初版を忠実に判型も揃えて刊行されたひとつの美術書といってもよいものである。訳者の茅野は「訳者の言葉」として「原著の絵画が世界の得難い珍宝とまで言われる原著初版本によって、現在日本の有する最高の技術に謁して複

製したものであり、その意味に於いて本書は初版本以外の如何なる刊本よりも勝れた絵画を持つに至ったことである。（略）原著が単に教育書としてのみではなく、実に立派な美術書ともなり得たのは、当初全く予想しなかった恵福と言わなくてはならない」と記している。確かに原著の表紙を飾るタイトル図はドイツ本国でも、「ドイツ図像の至宝」（j. プリュファァー）のひとつと高く評価され、ドイツロマン主義の成果と語られていることから、茅野の判断は正しい。ただ誠に残念なことに、初版版で付録として添付された「メロデー」本が削除されたまま刊行されたことである。その結果、フレーベルが「絵」「詩（言葉）」、そして「メロデー（曲）」の「三位一体」による、直接的な「母—子—関係」による育児書の精神が欠けたまま、流布することになる。その結果として、原著からフレーベル教育思想のロマン性が過度に強調され、原著がドイツロマン主義芸術作品としての側面から評価されることになる。フレーベルが描いた原著の原初的意図、すなわち『母親—子ども = 関係』を身体的な接触を通じて導く『教具』の側面が後退することになる。ドイツ本国でもその反省（家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の見直し）がなされるのは21世紀に入ってからである（参考文献、16、特に、Karl Renner, 'Mit einem Beitrag zum Verstandnison Frobels' Mutter-und Koseliedern s. s. 185-196 参照のこと）。

\*倉橋はこの貴重な初版本の入手について印象深く次のように記している。「わたしは、ブランケンブルヒのフレーベル博物館にあった二冊を、館の理事会まで開いて貰って漸く手に入れたのであるが、装丁といひ、一切の図案といひ、殊にウンガーの挿画に至っては、まことに古雅掬すべきものがある。」と。（倉橋惣三、『フレーベル』、岩波書店、昭和14年、136頁。）ここでは特に「フレーベル博物館にあった二冊」という文言に注意してほしい。二冊とは『母の歌と愛撫の歌』本体の一冊と別冊の『メロデー』本を指しているのだからか？多分そうであろう。論者の調査では、その他に京都大学中央図書館にこれまた本体本だけの一冊が所蔵されているが、『メロデー』本は存在しない。倉橋家への問い合わせでも『メロデー』本はないとのことであった。従って、わが国には『メ

ロデー』本は現存しないと推定される。

(3) 津川主一訳編『フリードリヒ・フレーベル  
母とおさなごの歌』（1939年、教会音楽社刊）  
【図5-1, -2, -3, -4】

先の茅野訳『プリュウフェル編及跋 フレーベル母の歌愛撫の歌』（1934年刊）は挿絵等、フレーベルの美術書としても、更にはフレーベルの詩文もその見事な訳詩からも極めて注目すべきものであるが、「メロデー」が削除されたままであった。その「メロデー」本に注目して、「解説 フレーベルの保育哲学と歌曲」を付してわが国ではじめて編纂し、刊行されたのがこの津川主一の本である。

津川主一（1896-1971）は牧師として布教活動に尽力しながら、また合唱指揮活動とともに数多くの合唱曲の編曲を手がけ、特に、外国曲（合唱曲、歌曲、民謡など）を日本語に訳詩する等、日本における「世界の童謡」の普及に大きく貢献した人物である。その経歴からみてもフレーベル育児書の「メロデー」本の訳編には最適の人物である。

津川はその「初版序文」でわが国における『母の歌と愛撫の歌』の刊行の歴史にふれながら、「岩波書店より出版された茅野蕭々氏訳のものは、それが原語に忠実なことと、倉橋惣三氏所蔵の初版本による表紙、扉、挿絵等を洩れなく載せている点でまことに歴史的な版と称してよい。ただ残念なことはそれに曲譜がないことと、余りに高価なことである。」と記している。この津川の指摘はまさに正鵠を射たものである。津川は、母や保育者がこの歌曲を用いる前に、先ず何よりも、「その一つ一つの歌曲が如何なる精神をもち、如何なる目的のためにフレーベルによって書かれたかを是非とも理解してもらいたい」と切々に訴えている。その上で、フレーベルが原著中で音楽を附さなかったものは、本著は歌曲集なるが故に省いたこと、「指ピアノ」の数曲は、フレーベルの指示に従って、新しく作曲したこと、二、三、我が国の国情に適するよう歌詞を変更したこと等、仔細に編曲等の方針についても言及している。本書の精神は、津川の「解説 フレーベルの保育哲学と歌曲」の次の文章である。「純粹なる音をもって表現されるものを音楽（歌曲）、色彩によって視覚に向かって表現されるものは絵画、空間のうち

に物体の塊によって表現されるものは彫刻や模型とフレーベルは呼んだ。」と。その上で、津川は「母とおさなごの歌“解説として「1 足あそび」から「45 窓のある教会の扉」の45全曲について簡潔な解説を施している。

津川本の特徴は、フレーベルの精神を基軸としながらも、各国の民謡曲、童謡曲、そして個人作曲家の曲を大胆に取り入れたことである。以下45曲全体を詳細に列挙する。

1. あしあそび — チロル民謡曲
2. かざみのや — アメリカ童謡曲
3. ころんだほうや — フレデリック・バラード曲
4. どこえいくの — フレデリック・バラード曲
5. あじのうた — フレデリック・バラード曲
6. カッチンとけい — ドイツ童謡曲
7. くさをかりましょう — ドイツ民謡曲
8. ひよこおいで — アメリカ民謡曲
9. はとよおいで — エリナー・スミス編
10. ちいさいさかな — ヨハネス・ブラームス曲
11. まと — フレデリック・バラード曲
12. おかしベッチャリコ — エルザス民謡曲
13. \*つばめのす — ローベルト・コール曲
14. \*はな = かご — ローベルト・コール曲
15. \*はとのおうち — ローベト・コール曲
16. ゆびのなまえ — フランス民謡曲
17. ゆびのあいさつ — スコットランド民謡曲
18. おばあさま — オーストリア民謡曲
19. やさしいおかあさん — フランス民謡曲
20. ゆびのかず — フランス民謡曲
21. ゆび=ピアノ — 津川主一曲
22. ゆび=ピアノにあわせるうた — 津川主一曲
23. ねるきょうだい — 古いフランス子守歌
24. あかちゃんとおつきさま — エリーナ・スミス曲
25. こどもとおつきさま — アメリカ民謡曲
26. ちいさいこどもとはし — アメリカ民謡曲
27. \*かべにうつることり — ローベルト・コール曲
28. かげウサギ — 古いフランス童謡曲
29. こまど — アメリカ童謡曲
30. まど — エリーナ・スミス曲
31. すみやき = ごや — フレデリック・バラード

- 曲
32. だいく = さん — ユーフェミア・パーカー 曲
  33. こばし — エリーナ・スミス曲
  34. きばしのもん — フランス民謡曲
  35. おにわのもん — アメリカ童謡曲
  36. ちいさいにわし — ドイツ曲
  37. においのうた — エリーナー・スミス曲
  38. くるまやさん — エリーナ・スミス曲
  39. さしものやさん — エリーナ・スミス曲
  40. おさむらいとよいこ — エリーナ・スミス曲
  41. おさむらいとわるいこ — エリーナ・スミス曲
  42. ぼうやかくれなさい — エリーナ・スミス曲
  43. ぼうやはいない — フレデリック・バラード曲
  44. カッコ — フレデリック・バラード曲
  45. まどのあるきょうかいのとびら — エリーナ・スミス曲。

驚くことに、ドイツ語版の作曲家R. コールの曲は\*印を附した13, 14, 15, 27の4曲しか入っていない。個人としては有名なドイツの作曲家ブラームスの曲(10)もあるが、フレデリック・バラードやエリーナ・スミスの曲が圧倒的に多く、津川自身の曲もある。多くは、各国の民謡曲、童謡曲、子守歌である。このことは一体何を物語っているのか。津川は基本的に、フレーベルの精神に即し、長く「親(保育者) — 子ども = 関係」を共に保持してきている地域や地方の歌(メロデー)、慣れ親しんだ「曲」を優先して編曲したと判断される。このことは実に重要なことで、津川の見識をしめしている。フレーベル編著、家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』がアメリカ、イギリス、フランスそして日本等、全世界に伝搬して行く際、各国では、ロベルト・コールの原曲よりは、むしろ長く慣れ親しんだ自国の民謡や子ども歌(童謡)を中心に編曲されている。その意味でも、津川訳編著はわが国の最初で、しかも最も注目すべき『母とおさなごの歌』であるが、初版本は、自費出版で刊行され、1957年4月30日に日本基督教団出版局から改訂版が出ることになる。改訂版への序文で津川は「御都合主義の政治や教育のおこなわれやすい今日の原水爆時代に、もう一度フレーベルの純真

な保育哲学と、不滅の「母とおさなごの歌」をかえりみてもらいたい。」と結んでいる。時代を見通した清廉なクリスチャンであった津川の一面が伺われる。同時に、津川は、わたし達がひごろ口ずさんできたロシア民謡「赤いサラファン」、フォスター作曲の「おおスザンナ」、そして民謡「アリラン」の作詞家でもあることも心に留めたい。

#### (4) 今日への展開 — 育児書『母の歌と愛撫の歌』から「運動遊戯」へ —

西垣光代/阿部扶早編著『F. フレーベルに学ぶ 幼児のための集団遊び』、頌栄幼稚園刊、2010年。[図6-1, -2, -3]

本書が刊行された幼稚園名、すなわち頌栄幼稚園を思い出してほしい。それはわが国で最初の民間による幼稚園として、すでに述べたようにアメリカの婦人宣教師アニー・L. ハウ女史によって神戸に1889(明治22)年開園され、同時に保母伝習所が創設された所である。本著は、小冊子ながらこの先駆的で、記念すべき幼稚園に残されている貴重な資料、「遊戯ノート」を活用しながら纏められている好著である。特に注目されるのは育児書『母の歌と愛撫の歌』を律動的な歌遊びに展開して、幼児のための集団遊びを具体的に紹介していることである。それはフレーベルの遊戯体系[図1]の時計文字Ⅲ、運動遊戯に接続するものである。

先ず、本著の「目次」からその内容(構成)を考察する。

1. F. フレーベルの運動遊戯、2. 頌栄に伝わる「遊戯ノート」、3. 現代に伝えたい幼児の集団遊び — A 紹介遊び(4点) B まりの遊び(12点) C 感覚の遊び(12点) D 律動的集団遊び(15点)、そして「あとがき」である。以下、要約的に説明する。

1. の「F. フレーベルの運動遊戯」について編者は、家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』(1844)を著した後、「その晩年にフレーベルの幼稚園で実践し、公表した「運動遊戯」とは、どのような意図を持ち、どのような方法で行われたのか」を問い、フレーベルの「運動遊戯」の内容を「旅行遊戯」、「表現遊戯」の実例をあげて説明し、フレーベルが実践した集団遊戯の特徴とその教育的意味を以下の5項目に纏めている。

1. フレーベルの教育思想の根本をなす生命合一(万物の統一性)を象徴する「輪」が重視される。その理由として、「輪」は幾何学的形状の調和性、美的面からも価値ある形であり、また複数の子どもたちによる「輪」、即ち、円形は、教育遊具の球や立体ではみられなかった「中心」を見ることができ、それによって美しい「輪」の拠り所が、中心であることを鮮明に予感できる。

2. 歩行、手を叩く、手の上げ下げ、しゃがんだり立ち上がったたり、身体の屈伸など、基本的な運動をリズムカルに行うことによって、四肢感覚の発達を促すことができる。

3. 保育者の誘導によりメルヘンの世界へと導き、子どもの想像性、創造性の能力を発揮することができる。

4. 集団で行われる運動遊戯には、一定の形の構成を集団で目指していることから、必然的に全体を規定する「約束ごと」があり、個々の子どもは自発的にその約束ごとを守ることによって遊戯が成り立つことを学び、全体の中での個の立場をすることができる。

5. 自然や実生活を表現することから、それらを注意深く観察する習慣ができ、正しい認識へと導くことができる。

このように編者達は、幼稚園の実践の中で、フレーベルが重視した運動遊戯が教育遊具Ⅱ(恩物等)の幾何学的な形やその位置関係から身体の動きを重視する『母の歌と愛撫の歌』に発展させ、そこでの遊戯が「生命合一」の思想の展開として「個」と「全体」の調和を促すものと捉え、保育内容の重要な分野の一つとしている。この考えは、われわれの国で平成20年3月28日学校教育法施行規則の改正にともなう新たな『幼稚園教育要綱』にもられた「幼稚園における遊びを通じての共感や秩序感の指導」という文言を導いた原則で特に重要である。

2. 頌栄に伝わる「遊戯ノート」では、A. L. ハウによって、アメリカで発展した運動遊戯をマリ・ルーフ・ホファー(Mari Ruef Hofer)著による2冊の遊戯集“CHILDRENS SINGING GAMES old and new”(1901年)、“POPULAR FOLK GAMES and DANCES”(1907年)から抜粋、翻訳されたことが紹介されている。特に、ハウ時代から伝わり、時代とともに取捨選択され、

新たに考案されたゲームや遊戯を纏めた「遊戯ノート」は注目される。本書では「遊戯ノート」の項目と遊びの種類が、Ⅰ理論編、Ⅱ実践編として紹介されているが、「遊戯ノート」の冒頭で「遊戯とは目的をもって遊び戯れることで、その目的とは子どもが身体的、精神的、知的に円満な発達ができるように助けること」と記され、その意味として5点添えられ、実践編でその内容が具体的に個別に指摘されている。この実践編は極めて重要であるのでそのまま紹介する。

1. 紹介遊戯(9種)、2. 毬の遊戯(4種)、3. 感覚の遊戯 a. 視覚の遊び(6種) b. 聴覚の遊び(17種)、c. 臭覚の遊び(4種) d. 触覚の遊び(8種) e. 味覚の遊び(4種) f. 筋肉感覚の遊び(4種) 4. リズム遊戯(約50種) 5. 唱歌遊戯(約50種) 6. 生活的遊戯(約20種) 7. フォークダンス(約20種) 8. 劇的遊戯(18種)。

編者は「頌栄に伝わるゲーム・集団遊戯は、フレーベルの思想とともにドイツからアメリカに渡って発展した遊びが伝えられ、さらに研究考案されたものが加えられたと考えられます。」と記している。この指摘は思想や実践の受容の在り方を考える上でも重要である。

3. 「現代に伝えたい幼児のための集団遊び一種として昭栄の遊戯ノートより一」。本編が本書の白眉といってよい。特に注目されるのは、各「遊び」にメロデー(歌、旋律、楽譜)が添付され、とりわけ、D「律動的な集団遊び」には全15にメロデーが添付されていることである。編者は冒頭で、「歌を歌いつつ、ルールにしたがってリズムカルな動きをする集団遊びは、幼児期の子どもたちの大好きな活動です。フレーベルはこれらの遊びによって子ども同士が喜びを共有し、心の一致を育むことから、個々の動作についても全体の調和を大切に考えています」と述べ、ルール感覚や、思いやりの心を育み、「リズムカルな動きによって身体的発達を促し、音楽的感覚を身につける」と結論づけている。ドイツ本国やわが国に導入されたフレーベルの育児書『母の歌と愛撫の歌』(1844)に見られる『メロデー本』の削除等を考えると、本書の編者達は確実にフレーベル思想の核心をその実践において証明していると言える。

このように本書は小冊子ながら、1887年A. L.



ハウ女史によって伝えられた保育内容（「運動遊戯ノート」）の「運動遊戯」を基底にしながら、それを今日の日本の幼稚園現場の経験に照らして現代風にアレンジし、「集団遊び」を中心に纏め、直ちに保育・幼稚園現場で活用出来る勝れた実践手引きとして評価されよう。同時に、本書を軸に日本からアメリカにおけるフレーベル式『遊戯とその実践の展開』、あるいはイギリス・フランス更には北欧等における『遊戯と実践』とそのオリジナルとしてのフレーベルの「遊戯（論）とその実践」をグローバルな観点から比較考察する事の必要性が提起されている（すでに2000年以降、ドイツではこのような動向が見られ、家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の新たな評価（見直しを含め）が著しいのである）。

#### まとめ—提言にかえて

以上、「子ども・子育て支援研究センターで活用するフレーベルの「遊戯」と「教育遊具（教具）」の実践の手引きの（1）として、フレーベルの最も重要で基本的な教具の一つである家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』（1844）がわが国ではどのように受容されてきたかを、1. アメリカからの宣教女史アニー・L. ハウの指導のもとに、1878年、ピーボディによって編纂され、ジョセフィンとジャヴィスによって英訳された英語版からの日本語版訳『母の遊戯と育児歌』（1898、昭栄幼稚園刊）、2. ドイツ語版（プルーファー編及跋）からのドイツ文学者、茅野訳による『母の歌と愛撫の歌』（1934、岩波書店刊）、3. 牧師、作曲家であった津川主一訳編による『フリードリヒ・フレーベル 母とおさなごの歌』（1940、教会音楽社刊）、そして、遊具体系のⅠ、家庭育児書『母の歌から愛撫の歌』からⅢの「運動遊戯」に接続する今日の実践本として、4. 西垣光代／阿部扶早経編著『F. フレーベルに学ぶ 幼児のための集団遊び』（2010、頌栄幼稚園刊）を考察してきた。その結果得られた成果は以下の通りである。

1. わが国での家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の受容は、当然のことながら、フレーベルの幼児教育思想の原理を基本としながらも、わが国のおかれた時代状況や時代の保育・幼児教育に対するその時代の要請の異なりを反映して家庭育児書に

対する活用の力点の置き所が異なること。

2. 具体的には、1) ハウ本では、あまりにも過度な日本化（欧化思想の裏返し）がみられ、フレーベルが求めた家庭育児書から大きく変質している。2) 茅野本は家庭育児書の挿絵等の美術書的评价と詩訳の見事さが伺われるが、子どもの身体的接触、身体的活動面が無いこと。これは基本的に「メロデー本」が欠落しことに依ると判断される。3) 津川本で初めて、育児書のもつ「メロデー」の部分が明らかにされ、『母の歌と愛撫の歌』の音楽的要素が明らかになったが、具体的にどのよう身体的活動、遊戯活動を喚起したかは判断出来ない。4) 西垣／阿部本によって初めて遊戯のもつ具体的活動の意味が明らかになった。それは長年にわたる実践的な保育経験を積み重ねて、作り出されたものと評価される。これらの経験から本書は家庭育児書にみられる遊戯の個人的側面から集団的な遊戯、集団的活動に「遊び」を展開する筋道を示したのは高く評価される。それはフレーベルがスイス時代に体得した知見である。集団遊びによる幼児のルール感覚の「予感」や仲間と共に遊ぶことから獲得される「共同感覚」の意識の芽生はその後の人間としての発達の基礎となるからである。

3. 最後に提言として、広島文化学園大学子ども・子育て研究センターの「歌」を作る。音楽学科の先生に作曲を依頼し、それを子ども・保育者（母親・学生）全員で歌う。同時に、近時開設される「文化の森」を野外活動の場として集団遊びを中心に子ども身体的・感性的・知的訓練の場として諸能力を磨く。

参考・引用文献（本『子ども・子育て支援研究センター年報』では執筆要項において注及び引用・参考文献の形式が規定されているが、本稿はすでに、規定の分量を超えているので、簡略化して、一括して記載する。）

1. 独逸フレーベル著『母の遊戯及育児歌』上、下巻、頌栄幼稚園出版、再版、1904（明治40）年。
2. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』（プルーファー編及跋）茅野齊々訳、岩波書店、1934年。
3. 『フリードリヒ・フレーベル 母とおさなご

- の歌』津川圭一訳編、1940年、教会音楽社。改訂版、日本基督教団出版局版（1957年）を使用。
4. 『F. フレーベルに学ぶ 幼児のための集団遊び』  
西垣光代／阿部扶早 編著、頌栄幼稚園、2010年。
  5. 石橋哲成『フレーベル教育思想の日本への受容』（増補版）玉川学園DTP製作、2010年。
  6. 小笠原道雄（1994）『フレーベルとその時代』、玉川出版部。
  7. 小笠原道雄（2000）『フレーベル』、清水書院。
  8. R. ボルト／W. アイヒラー著小笠原道雄訳（2006）『フレーベル、生涯と活動』、玉川大学出版部。
  9. 小笠原道雄論（2011）「子ども・子育て支援研究センターで活用するフレーベルの「遊戯」と「教育遊具（教具）」についての考察—その体系的性を考慮して—」、子ども・子育て研究センター年報 第1号、5-15頁。
  10. 小笠原道雄論（2009）「新しい資料の解説によるフレーベル「教育遊具」の体系的考察—資料批判と今日的課題—」、広島文化学園短期大学『紀要』、第42号、1-10頁。
  11. 小笠原道雄論（2008）「未刊行資料の解説によるフレーベルの家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の成立に関する考察」、広島文化学園短期大学『紀要』、第41号、1-12頁。
  12. 小笠原道雄論（2007）「フレーベルの家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の成立に関する考察—未刊行資料の解説に関する考察（1）—」、『日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要』第19号、15-28頁。
  13. Margitta Rockstein (2004), Kindergarten, Bad Blankenburg.
  14. Michael Grübler (hrsg.)(2002), Friedrich Fröbels Mutter-, Spiel- und Koselieder im Originalsatz von Robert Kohl. Saale.
  15. Margitta Rockstein (hrsg.) Friedrich Fröbel Spiel - Lieder, Bad Blankenburg. o. j.
  16. Hermann Fröbel/Dietrich Pfaehler (hrsg.) Kommt, lasst uns unsern Kindern leben, Fröbels Mutterß und Koselieder, 1982.
  17. F. A. Fröbel (1876) Mutter- und Kose-Lieder, Berlin. 4. Auflage. [本著にはR. コールのメロデーが書名' MELODIEN zu den Mutter-, Kose-und Spielliedern von ROBERT KOHL' として楽譜・原曲が巻末に挿入されている。]
  18. Johannes Prüfer (hrsg.) Friedrich Fröbels Mutter = und Kose = Lieder, 4. Auflag. 1927.
- （本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成）（基盤研究（C））、平成24年度-26年度）による「スイス時代の未刊行資料の解説によるフレーベル幼児教育思想の形成と展開の研究」の研究成果の一部である。）

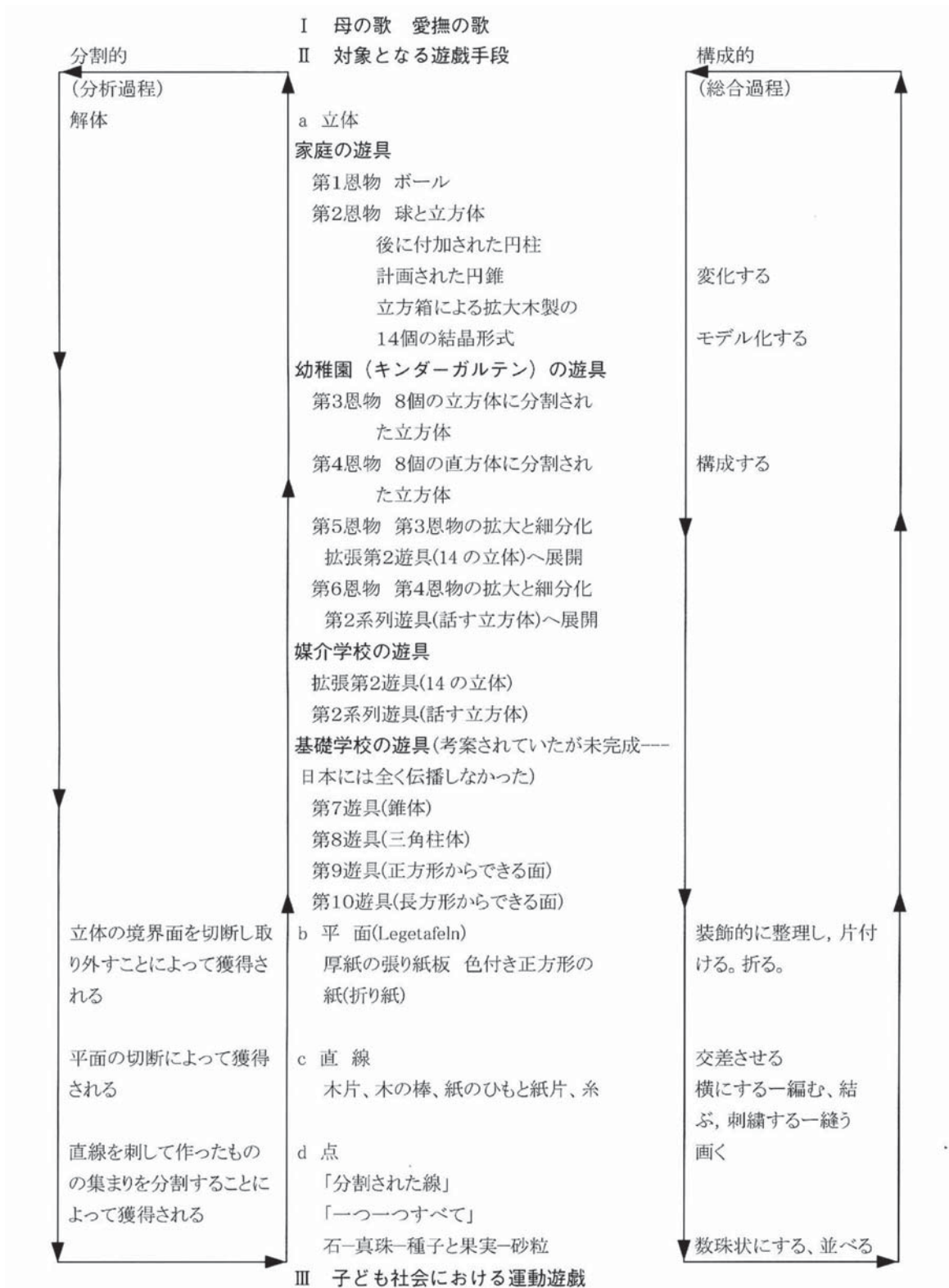


図1 フレーベルの発達の・教育的遊具（恩物）の体系

„Kommt, laßt uns unsern Kindern leben!“

# Mutter- und Rose-Lieder.

Dichtung und Bilder

zur

EDLEN

Pflege des Kindheitslebens.



Ein Familienbuch

von

Friedrich Fröbel.

„Gar hoher Sinn liegt oft im kind'schen Spiel.“

Mit Randzeichnungen, erklärendem Texte und Singweisen.

Blankenburg bei Rudolstadt,

die Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit und Jugend.

図2 原著ドイツ語初版本 『母の歌と愛撫の歌』表紙

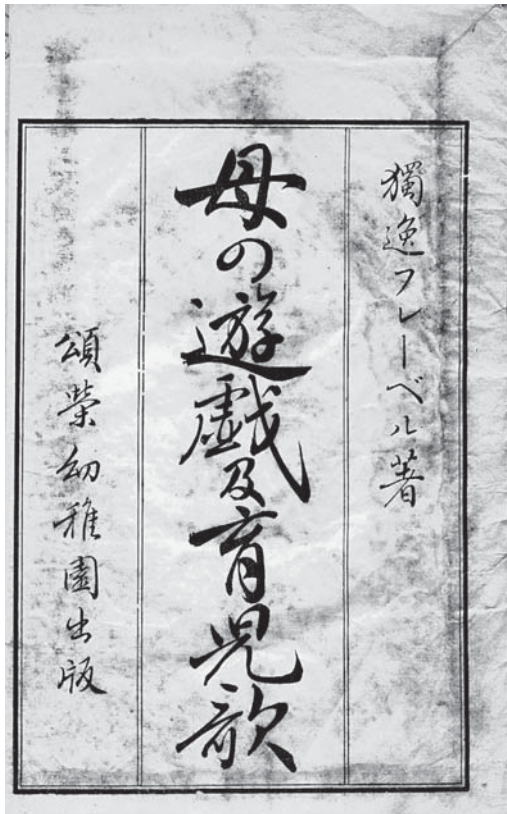


図3-1 日本語のハウ版本 タイトル



図3-2 日本語のハウ版本 扉



図3-3 日本語のハウ版本 装丁表紙



図3-4 日本語のハウ版本 装丁裏表紙

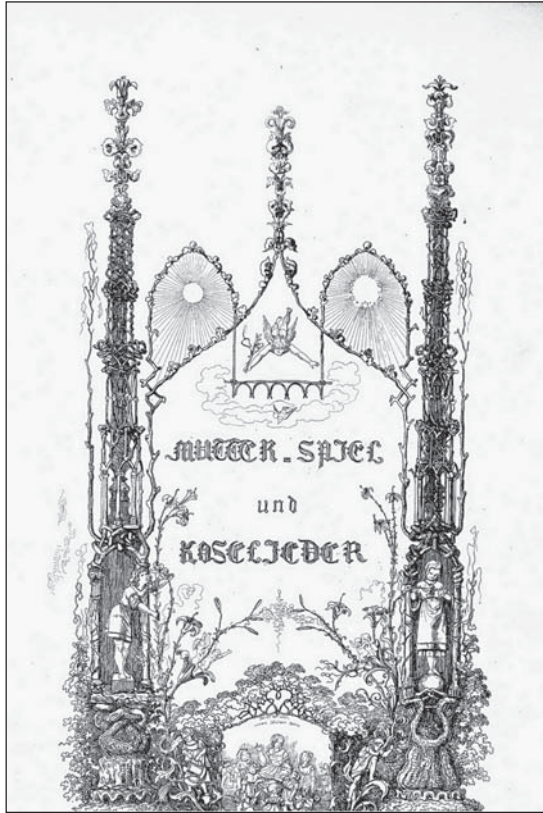


図4-1 日本語の茅野本 扉



図4-2 日本語の茅野本 和文タイトル



図4-3 茅野本 装丁表紙



図4-4 茅野本 装丁裏表紙

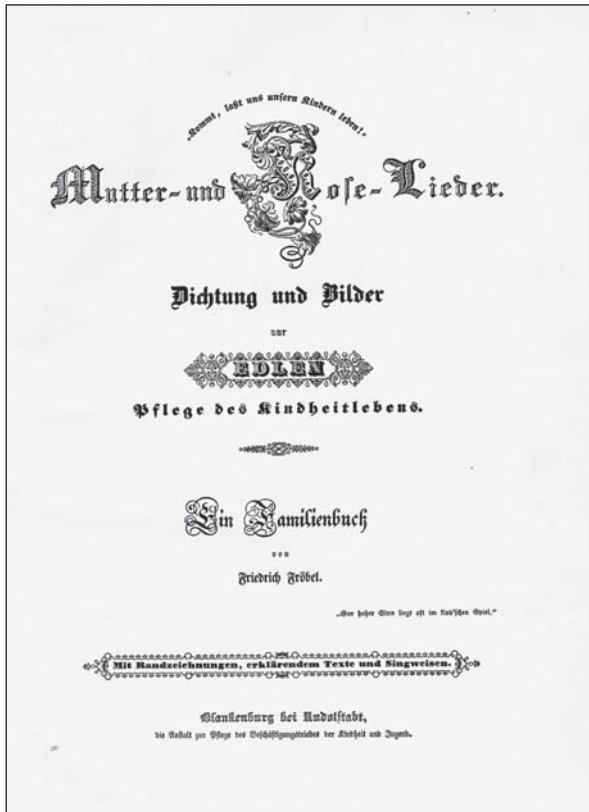


図4-5 茅野本 原書タイトル

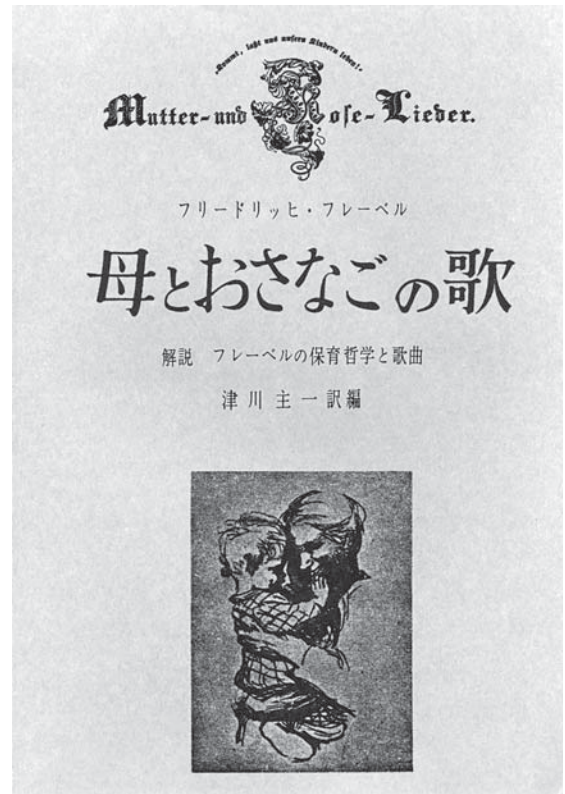


図5-1 津川本 装丁表紙

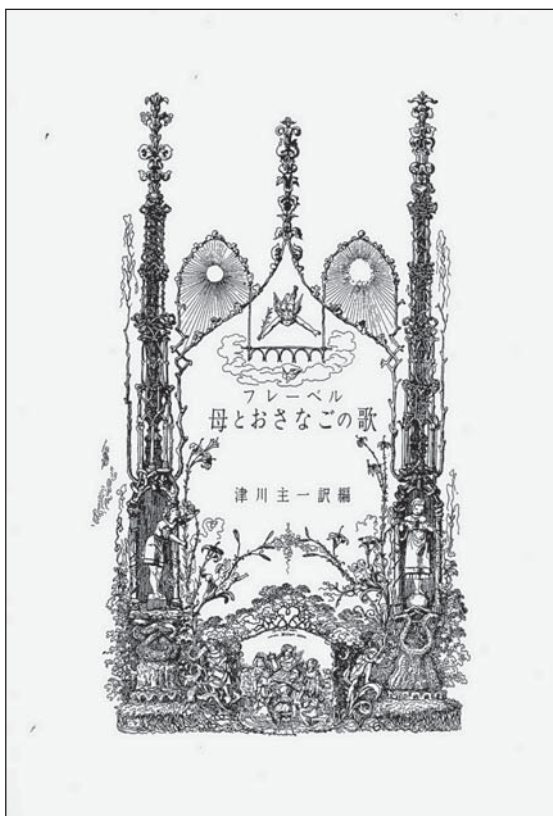


図5-2 津川本 表紙

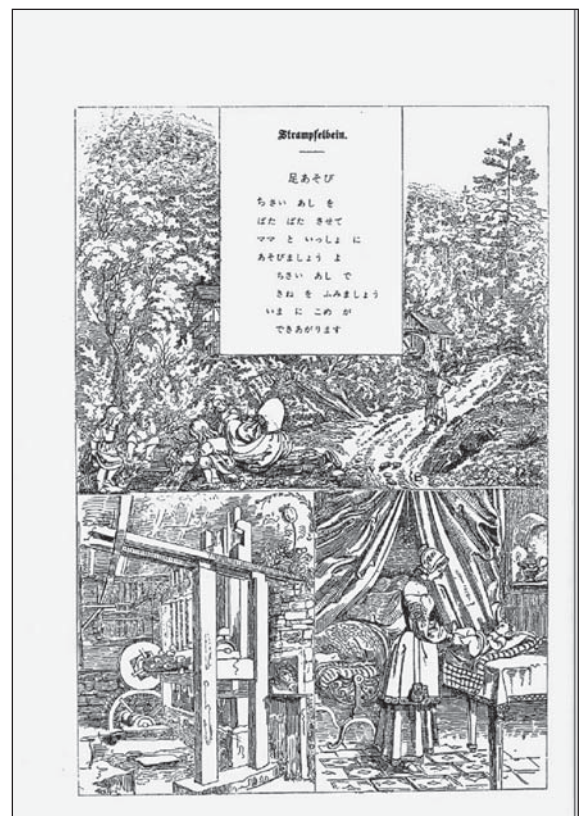


図5-3 津川本 足遊び. 絵と詩

津川 圭一 訳詞 1. あし あそび チロル民謡

Con moto

1 も さい あし も、 ほ た ば た さ せ て、  
2 も さい あし で、 \*\* き ね を ふ み こ じ ゅう。

\* マ マ と こ に、 あ そ び ま し ゅう ぶ。  
い ま に き が、 で き が り ま す。

●又は「あそび」と、\*\* 原作には「けしやごせからあそびをしはり、フツプをとりや」とある。

津川 圭一 訳詞 2. かざみのや アメリカ 童謡曲

Moderato

あ ち こ ち \* か ざ む の や、 あ ち こ ち ま わ り ま す、

ぼ う やー の お て て も、 と く ま わ り ま す。

● 原作には「かざみのや」とあります。

図5-4 津川本 足遊び. 曲 (チロル民謡)

F. フレーベルに学ぶ  
幼児のための集団遊び

西垣光代/阿部扶早  
編著

頌栄幼稚園

図6-1 西垣/阿部本 表紙

D 律動的な集団遊び (括弧内は、原書の題名と出典国)

歌を歌いつつ、ルールにしたがってリズムカルな動きをする集団遊びは、幼児期の子どもの大好きな活動です。フレーベルは、これらの遊びによって子ども同士が喜びを共有し、心の一致を育むことから、個々の動作についても全体の調和を大切に考えています。

また、以下に紹介する遊びのうち、1~6がいずれも1人の子どもから出発し、輪の子どもたちが自分もやりたいという衝動を呼び起こされ、2人、4人、8人と増えていくように仕組まれていることも大切な点です。礼儀正しく誘うことにより、社会的約束事や、思いやりを身につけることにもなります。リズムカルな動きによって身体的発達を促し、音楽的感覚を身につけることは言うまでもありません。

28

図6-2 西垣/阿部本 集団遊び説明

1 おはようスキップ (GREETING AND MEETING スウェーデン)  
歌

(1) おはよう おはよう こきげんはいかが  
(2) ララララ ラララ ラララ ラララ

いっしょに あそぼう てをとって  
ラララ ラ ラララ ラララ ラララ

遊び方 「おはよう おはよう」 1人の子どもが自分が選んだパートナーの前に立つ。  
互いに握手を5回する。  
「こきげんはいかが」 向かい合ったまま拍手を5回する。  
「一緒に遊ぼう」 パートナー同士、右手と右手、左手と左手を八の字になるように組み、進行方向に歩く。  
「ランラララランララ…」 全曲スキップでサークルを回り、新しいパートナーを探しに行き、次々に繰り返す。

応用 2人で手を組んでスキップをすることが困難な3歳児の場合「おはよう・・・一緒に遊ぼう」までは、同じで、「手を取って」のところを、「カエルになって」とか「ぞうさんで歩こう」など、子どもの希望に従って、「ララララ・・・」のところは表現遊びとしてもよい。

(注) 日本の幼稚園にスキップを始めて導入したアメリカ人宣教師 F. マコーレーが、広島英和女学校付属幼稚園に在任時、同幼稚園園児たちが、この原曲にある「How'd ye do my partner」の部分を「おはよう おはよう」と自然に歌い始めたことから「おはようスキップ」といわれるようになって、今日に至っている。

29

図6-3 西垣/阿部本 集団遊び歌